



資料4

府食第716号

平成25年9月4日

食品安全委員会委員長 熊谷 進 殿

調査・研究企画会議座長 佐藤 洋

平成25年度食品健康影響評価技術研究の追加採択課題（案）について

このことについて、平成25年8月8日に開催した第3回調査・研究企画会議における審議の結果、別添のとおり取りまとめましたので、報告いたします。

(別添)

平成25年度

食品健康影響評価技術研究の追加採択課題（案）
について

平成25年8月

食品安全委員会 調査・研究企画会議

平成25年度 食品健康影響評価技術研究の追加採択課題(案)

受付番号 主任研究者名 (所属機関名)	研究課題名 (研究期間)	研究概要	評価所見	評点
56 小野 敦 (国立医薬品食品衛生研究所)	遺伝毒性発がん物質のリスク評価に関する研究 (平成25年度～平成26年度)	国際機関や各国評価機関で用いられている遺伝毒性発がん物質のリスク評価手法についての情報収集を行うとともに、発がんリスク評価における遺伝毒性データ利用法についての検討を行い、得られた結果を基に我が国における遺伝毒性発がん物質の安全性評価指針案を作成することを目的とする。	<ul style="list-style-type: none"> ○必要性の高い研究である。 ○1年目の研究成果をよく見てみたい。 ○遺伝毒性発がん物質のリスク評価指針を作成する研究方向性は今回の公募内容に一致している。GPTdeltaについてはもう少し検討して欲しい。 ○TG試験の発がんリスク予測の精度と予測性を明確にしてほしい。 ○TG試験もデータ集積のために有用なものである。 ○発がんリスク評価における遺伝毒性データ利用法に関する研究、遺伝毒性発がん物質のリスク評価基本指針の作成の2つの研究は、極めて重要度が高い。 ○遺伝毒性発がん物質に対するガイドラインの作成に期待する。 ○研究項目1について、本研究全体にどのように活用できるのか。リスク評価基本指針の作成は有効。 	16.4
59 田村 豊 (酪農学園大学)	鶏由来薬剤耐性カンピロバクターおよびサルモネラの定量的食品健康影響評価モデルの確立 (平成25年度～平成26年度)	食用動物由来薬剤耐性菌のリスクが定量的に評価されているが、定量的リスク評価の確立に向けて、肉用鶏由来サルモネラとカンピロバクターのフルオロキノロン耐性(低感受性を含む)を対象に、発生評価、暴露評価および影響評価の各段階における実験による不足データの作成と公表情報の収集によりリスク評価に必要な情報を集積し、定量的リスク評価モデルを構築する。構築されたモデルに基づき、食用動物由来耐性菌の定量的リスク評価ガイドラインの設定に向けて収集すべき情報を明らかにする。	<ul style="list-style-type: none"> ○No.61と統合すべき。 ○対象とした菌については成果が出てくるであろうか。モデルの汎用性・拡張性に不安が残る。 ○定量的リスク評価指針作成のための国際的情報の収集が少ないので、受付No.61の研究課題と統合した研究班にした方がよい。 ○定量的リスク評価への手法として現実性あり。ただし、単独で最終的な成果を得るのは難しい可能性あり。 ○きちんとできれば有用。 ○意義については専門の委員の評価にまかせたいが、No.61と比べ、より地道な研究デザインを提示しており、こちらの方が採択に値するのではないか。 ○日本におけるデータ収集が困難と思われる。 ○No.61とディスカッションする必要あり。 	14.3
61 豊福 肇 (山口大学)	食用動物由来薬剤耐性菌の定量的リスク評価モデル確立に関する研究 (平成25年度～平成26年度)	食用動物由来薬剤耐性菌の定量的リスク評価に必要な情報の検討、収集を行い、諸外国のリスク評価手法も参考にして、定量的リスク評価モデルを構築するとともに、定量的リスク評価指針の設定に向けて必要な情報を収集する。	<ul style="list-style-type: none"> ○No.59と統合すべき。 ○計画はしっかりしているが、机上の理論になりかねない。No.59と統合することは可能か。 ○定量的リスク評価モデル確立のためには必要な実験・研究が不足している。No.59の田村氏の研究と統合した方がよい。 ○関連する研究を合体し、共同して進めることも考慮すべき。 ○1年間で基礎整理は有用か。 ○意義については専門の委員の評価にまかせたい。海外データに頼る部分が大きく、研究遂行に不確実性が残る。 ○研究課題と研究する内容が一致していない。 ○No.59とディスカッションする必要あり。 	14.4

※評点20点満点